

体験交流館ニュース

■第9回心の手紙コンテスト ～母から子への手紙コンテスト表彰式～

「母から子への手紙コンテスト」表彰式は12月5日、学びいなホールで挙行政され、町絆づくり実行委員会の八子弥寿男委員長あいさつの後、大賞の勝又千寿さん(静岡県)ら入賞者21人に表彰状や記念品などが贈呈されました。

最終選考委員長で芥川賞作家の玄侑宗久さん(三春町)は、受賞作全体を通して『信じて見守る』という母の強い気持ちを感じた」と講評。同委員でエッセイストの大石邦子さん(会津美里町)も「適切な距離を置きながら子に愛を注ぐ『遠いまなざし』のような気持ちが大切だと感じた」と述べました。

会場には受賞者のほか、今回の審

査にかかわった町内のお母さんたちも駆け付け、大賞を受賞した勝又さんの朗読にじっと耳を傾けました。

この後、最終選考委員で講談師でもある末利光さん(小川正子記念館・春日居郷土館名誉館長)が「素顔の野口英世(海外編)」と題して講談を披露、会場を沸かせました。

表彰式終了後には受賞者、関係者を交えた懇親会も開かれ、一次選考会を担当したお母さん委員会のおもてなし料理や絆づくり実行委員の涌井靖さんの手打ち蕎麦などが振る舞われました。

応募総数1,240作品の中から、見事大賞に選ばれた勝又千寿さん(静岡県)の作品を紹介します。



八子委員長から表彰を受ける勝又さん



講談を披露し会場を沸かせた末利光さん



懇親会で親睦を深める受賞者と関係者ら

※「母から子への手紙」入賞作品は、町ホームページでご覧になれます。

大賞作品

勝又千寿(静岡県)

この前の日曜日の事、ママは一生忘れないよ。いつもの公園でジャングルジムから下りれなくなつて泣き出した君。でも、足の悪いママは、下から見てる事しかできなくて、すごく悔しくて悲しかった。そしたら、君は、一段一段自分の足で下りて、最後の七段で、「ママが見てくれたから頑張ったよ」って涙と鼻水でごっちゃんになった顔でママの胸に飛び込んできた。ママ、はっとして涙が出たんだ。だって、ずっと悩んでたから。十分に遊んであげられないママは君にとって必要な存在なの？って。自信がなかったママに、「そこにいるだけでいいよ」って教えてくれたのは四歳の君なんだよ。これからもママは少し離れたこのベンチで君を見ているね。もどかしく思える距離だって愛しい長さだつて思えるの。それにね、ここからだ、君の周りの風景も全部がよく見渡せるんだ。



■いなわしろふる里かるた大会開催

第1回いなわしろふる里かるた大会は12月7日、学びいなで生き粋セミナーとかるた名勝史跡探訪講座の受講者を対象に開催されました。かるた制作時から協力を頂いた鈴木清孝さんからかるたの絵札と読み札の解説、鈴木邦子さんから読み札の読み上げの指導を受け、受講者らが熱心に競技に取り組みました。結果は以下のとおりです。

(個人戦)第1位 渡辺アイ子 第2位 関和公子 第3位 鷲尾房子、六角智恵子 (団体戦)優勝 稲グループ 準優勝 白百合グループ

猪苗代町体験交流館からのお知らせ

■おいしく楽しくクッキング

身近な食材でできる家庭料理をテーマに、料理教室を開催します。参加を希望する人は1月14日(金)までに、学びいなに申し込んでください。

託児室を準備できますので、必要な人は申し込みのときに申し出てください。

●期日と内容(全4回)

①1月26日(水)
地元の素材でつくるフルコース

②2月4日(金)
冬野菜でポッカポカ韓国家庭料理

③2月15日(火)
地産地消の勧めと食育を考える

④3月4日(金)
お家で中華かんたん家庭料理

●時間：午前9時30分～午後0時30分

●場所：学びいな ●参加費：1回700円程度



■会津藩主松平家墓所「土津神社」と 周辺を伝えるコーナーを設置

ふるさと歴史館では、上記コーナーを設置します。猪苗代を代表する歴史上の人物。その人物像を探ってみてはいかがでしょうか。

●期間：1月5日(水)～3月31日(木)

●場所：ふるさと歴史館2階 ロビー

●入場無料

※写真誤りのお詫びについて

広報猪苗代12月号中の学びの泉No.166で紹介した編み物教室の写真に誤りがありました。記事中で使用した写真は、古川さんの編み物教室とは違う、別の編み物グループの皆さんの作品でした。心からお詫びいたします。

教育委員会コラム ～第九回～

法正(ほうしやう)厩遺跡(うましろいせき)（磐城自動車道磐梯山サービスエリアのあたり）からの出土品約八百点が、国の重要文化財に指定されたのは、一昨年の七月だった。

その出土品は現在、県文化センター白河館(まほろん)に収蔵されている。私も見たが、出土品の多くは、東北北部、新潟県山形県や秋田県などから伝わって来たもので、縄文のころから人々の交流があったことが分り興味をそそられた。そして、各種土器などに混じり、硬玉製大珠と呼ばれるものがあつた。硬玉とは言うまでもなくヒスイのことで、これももちろん福島県内からは採れない。

富山県と新潟県の境あたりを流れ、日本海へと注ぐ姫川の上流が古代におけるヒスイの産地だったことが確認されている。いわゆる勾玉という緑色の美しいものだが、この硬い石にどうやって「穴」を開けたのか、長年の疑問であつた。

数年前に発行された雑誌に載っていた某先生の説によると、篠竹の錐を火起こしの仕掛けのようなものに取り付け、ヒスイと同じ硬度の砂と水をかけながら錐を回転させ、2時間くらいで開けたらしい。縄文時代は時間の流れがゆっくりで、大変な時間をかけて開けたのかと思っていたが、そうではなかったようだ。縄文時代のハイテクノロジである、縄文人の知能も現代人と変わらなかったようである。